

報告は6本でした。

1 学校教育における CLIL の活用 山西 敏博(大学教授、秀明大学)

報告者が、教員(高校、高専、大学)として、ICT を活用した、CLIL(内容言語統合型学習)を Cooperative Learning(協同学習)でおこなう実践例を紹介された。STEAM(科学、技術、工学、芸術、数学)の内容、具体的には、中学での教科(英数国理社、実技教科)や、高等学校での専門学科の学び(商業、工業、農業、水産業、看護)を男女間で協力しながら、自発的な発表能力まで高めることの意義が強調された。

2 教材生成革命の中で、私たちは何を教えたのか 小笠原 孝司(高校教員、北星学園大学附属高校)

「個別最適化」が尊重される現在、関わる生徒の状況から、生成 AI が進化した今、使う人の感覚、価値観、生徒に何を学んでほしいかにより、生成 AI を有効に活用して、教材を開発し続けている。例えば、どんなテキストからでも、入試英語対策の教材を生成できる。一方で、リーディングの内容を深く分かち合うといった深めることが難しい。生成 AI のプロンプト使用知識共有の余裕がないといった課題が示された。

3 ICT 教材を活用した授業の実践 福士 直尚(高校教員、北海道苫小牧西高等学校)

「一人1台の端末」を効果的に活用している事例が紹介された。単語試験、文法試験、音読試験、そして定期考査をすべて、道内の業者が開発している AI システムを用い、生徒がタブレット上で行っている。生徒は学習の成果を即座に確認でき、教員は採点処理が大幅に短縮されている。定期考査では、択一式に加え「記述」も AI システムで行える。また別の業者による「到達度テスト」で web 受験により、個々の生徒に最適な連動課題配信が出されるシステムを活用している。経済的負担をおさえることを配慮しながらも、効果をあげている取り組みである。

4 北海道をひらく英文法指導 平子 裕(高校教員、北海道津別高等学校)

大学生・大学院生時代から社会教育学を専攻してきた、初任6年目の平子先生が、地域題材を活用した文法指導に関する実践をした。現代だからこそ外国語科の普段の授業の中で大切にすべきことを検討した。アイヌの歴史から現在完了をつかもうとした、高校3年生との実践記録。教科書本文を理解した後、国連が定義している先住権を読解した。アイヌのサケ捕獲権訴訟(Salmon Lawsuit)を題材に、Writing で、意見を問うた。生徒の表現から、アイヌの戦いの歴史を現在完了でこそ語れることを生徒が気づけるように支援をした。

5 英語が苦手な生徒の主体性を伸ばす探究的な英語授業 森藤 幸(高校教員、北海道羽幌高等学校)

小学校教諭としても勤務経験があり、Can-Do リストを活用し、生徒が、長期的な視点に加え、単元毎に振り返りを行えるようにしてきた実践である。教員が、生徒の目標、振り返りにコメントをつけることを続け、支持的なかわり、生徒との関係深化、変化の早期発見といった、生徒指導の効果も見えてきている。自信を失っている生徒は自己評価が低く出がちで、Can-Do 評価と実際の成績がずれがちという課題もある。一方、自己表現力・自己調整力を同時に育成できる利点もある。

6 高校における「表現力」育成への取り組み 徳長 誠一(高校教員、北海道旭川西高等学校)

公教育の中で「論理表現」の目標達成への課題を言及する。教科書の内容が「型」の定着ドリルを経て、「活用」(「話す(やりとり)(発表)」「書く」の活動を通じ、思考・判断・表現)を求める構成になっている。しかし、学力層的にみると「活用」中心に行えるのは学力上位層であり、中位層以下は「型」を示しながらの発信力強化の学習を無理なく行うことで学習効果を上げられるだろう。「型」の定着演習として、「同時自己添削英作文」で自由英作文の解答例を表現する演習などを紹介した。英語科教員は「授業改善」という「創意工夫」を求められ続けているが、少人数学級の実現、ICT, AI の環境等で、保護者負担を軽減させるといった環境の改善こと大切である。